

Title	<翻訳>ブラーフィー語短編小説2題
Author(s)	アリー, リアーカット
Citation	印度民俗研究. 2023, 21, p. 87-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91743
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ブラーフイー語短編小説 2 題

リアーカット・アリー 訳・註

解題

ブラーフイー語はパキスタン・イスラム共和国バローチスタン州を中心とした地域でおよそ 300 万人に話され、南インドを中心に分布するドラヴィダ語族言語のうち最北の言語である。バローチスタンではイラン系のバローチー語の話者が人口の多数を占め、ブラーフイー語話者はマイノリティである。しかし、ブラーフイー語話者はバローチー語話者とともに広義の「バローチ人」と認識されており、結婚その他においてブラーフイーであることによる差別は存在しない。17 世紀から英領時代まで存続したカラート藩王国の藩王もブラーフイーであった。バローチスタンは 1872 年にイギリスとイランによって分割されているが、イギリス側のバローチスタンではカラート藩王国がイギリスから 1947 年 8 月 12 日に独立を宣言した後、パキスタン軍が侵攻し、1948 年にパキスタンに併合された。バローチスタンは豊富な天然資源でパキスタン経済を支えている一方、年間降水量が 500 ミリ未満の乾燥地帯で灌漑も普及しておらず、住民の経済水準は立ち遅れている。ブラーフイーを含むバローチ人はほとんどがスンナ派イスラーム教徒である。伝統的には遊牧と農耕に携わっており、遊牧民はホラーサーンからスィンドまでの広い地域を 1 年の周期で移動しつつヤギや羊を飼育している。

英領時代の 1883 年から、宗教教育を兼ねたブラーフイー語教育が行われるなど、一定の言語の開発は行われていたが、本格的に文芸活動がさかんになるのは独立後である。現在では *Talār* (<https://talarbrahui.com>) のようなブラーフイー語の新聞も刊行されている。ここに挙げた『旅人 (Musāfir)』は、ハエバット・ハーン (Haibat Khān) が *Navā-e-Watan* 誌に 1955 年に発表した短編である。本作では英領時代のバローチスタンを舞台として、自由を求めて闘い続けるバローチ人の姿を描いている。本作はクエッタのブラーフイー・アカデミーから 1976 年に出版された短編集 *Mistāī* に再掲された。同短編集は 2015 年にブラーフイー・アカデミーから再版されている。本作がハエバット・ハーンの唯一の作品である。彼については生没年などの情報が知られておらず、誰かの筆名であった可能性も排除できない。

もう一篇の『愛の囚人 Mehranā Kaidīk』は、ガムフアール・ハヤート (Ghamkhwār Hayāt) による 2019 年の作品である。本名は Hayāt Muḥammad Khān、1975 年に Noshki で生まれ、ブラーフイー語で M.Phil 号を取得後、Boys Degree College Noshki で講師を勤めながら小説や詩を発表している。2014 年に刊行された自伝的小説 *Ṭembo* はアッラーマ・イクバル賞を受賞した。本作は恋人と待ち合わせて散歩する回想から始まり、夢の情景へと展開する夢幻形式の短編であるが、強権的な抑圧が続くバローチスターンの政治状況が隠れたテーマとなっている。

参考文献

- Ghamkhwār Hayāt. 2019. *Zind Zindān Ase*. Noshki: Otan Culture Academy.
Haibat Khān. 2015. *Mistāī*. 2nd edition. Quetta: Brahui Academy.

※本稿の日本語訳に当たっては小林正人東京大学文学部教授の助力を得た。ここに謝意を表す。

ハエバット・ハーン作『旅人』(1950)

族長^{サルダール}イーダル・ハーンの部族は、ポーラーン峠を通過してナーリーの方へと下っていた。夕禱のころ、部族はビービー・ナーニー廟の敷地で夜を過ごすために止まった。夜になった。女たちが食事の支度をしている間、部族の子供たちはビービー・ナーニーの墓にお参りするのために、河床へと降りていった。彼らは息せききって帰ってきて、イーダル・ハーンに言った。

「シャエ・ムレードを見たよ！ビービー・ナーニーのお墓の横に立っていたんだ！」

族長イーダル・ハーンは、数人の男を連れて、その方向へと向かった。ビービー・ナーニーの墓の頭部分の脇に、白い髭をたくわえた一人の男が立っていた。族長は近くに寄って呼びかけた。

「おじ様はどなたですか？」

「今夜は世話になるよ。」

族長は歩み出て、老人と挨拶をかわした。それから老人を連れて、部族のいる方へと歩いていった。

族長イーダル・ハーンの寄合は、毎晩と同じように集まっていた。部族の子供たちや、女たちも、やって来た自分たちの客人を見ようと集まっていた。族長は寄合衆に同意を得てから、客人のほうに顔を向けて言った。

「おじ様、あなたはどなたですか？ご自身についてお話してください、長老。」

老人は寄合衆のほうに目をやってから、ゆっくりと話し始めた。

「族長、これは三十年も前の話になる。その時わしは、マリー人の土地におった。わしはマリー人の一度目の蜂起は覚えておらん。だが彼らがイギリス人に対して起こした二度目の蜂起は、わしはよく覚えておる。¹

わしが年若い少年じゃった時、ある夜マリー人の一族のもとに泊めても

¹ マリー人 (Marri Baloch) はイギリスに対して 1840 年、1880 年、1917 年に蜂起している。本作が書かれた 1950 年頃から 30 年前の回想だったとすると、1917 年の蜂起のことと考えられる。

らった。その一族の年寄りも若い衆も、大きな火の四方に座っておって、山羊が丸焼きにされておった。若い衆は刀の手入れをしておった。年寄りたちは前装銃に弾を込めておった。一族の子供と女たちはそれとは別に、歌を歌って拍子を叩いておった。つまり、皆が氣勢を上げておったんじゃ。この興奮が一晩中続いたが、何をしておったのか皆目分からなかった。その夜の集まりが何のためか見当がつかなかった。

(朝起きてみると、) 村には人っ子ひとり見当たらんかった。しばらくして、刀自が一人、わしのためにパンとバターと酸乳を持ってきてくれた。その刀自に、『あなた方の男衆はどこに行かれたんですか?』と尋ねた。刀自はわしの目を見て、それから言った。『息子や、わたしたちマリー人のコーヒスターンを、初めにイギリス人が力づくで奪った。他のバローチたちが守ってくれなかったから、その時もマリー人は戦った。マリー人はイギリス人の略奪を忘れておらん。長い年月ののち、今日マリー人はもう一度イギリス人と戦う準備ができた。今回はコーヒスターン中の谷や宿営地にマリー人が集まって、先祖の土地のために戦っておる。』

この話を聞くや、わしは食事をやめて、なまくら刀を取って立ち上がった。刀自はわしをまじまじと見つめ、ふたたび言った。『坊やや、わたしには分かるよ。お前はバローチだね。お前の中には、今でも先祖たちの誇りがある。でもよく聞いておくれ、この戦いを決めたのは、ここマリー人のコーヒスターンに限った話ではない。かつてマリー人は自らを犠牲にした。殺されたのは、他のバローチ人が助けなかったからだ。今回もマリー人は孤立している。いつもマリー人ばかりを犠牲にしているのは、よいことにはならん。息子よ、この話を聞いておくれ。すぐにここから出発して、すべての地方のバローチたちに、「マリー人はおのれの土地に子供たち、大人たちの血を流すため、ふたたび立ち上がった」と伝えておくれ。バローチ人の国に誇りがあるなら、全土でイギリス人と戦うよう伝えておくれ。息子よ、このヒジャブにかけてのお願いだよ、この婆の言葉を国の隅々に届けておくれ。』

勇ましい刀自はわしの頭に接吻して別れを告げた。族長、それから今日で三十年になるが、わしは自分の家には帰らなかった。わしはこの国の家

から家、天幕から天幕へと、あの勇ましい刀自の言葉を伝えてきた。わしは国のあちら側にもまっすぐ行って、イランのバローチ人たちにも知らせた。

わしは勇士ジーアンド²の銃声を聞き、かれがイギリス人と獅子のように戦うのを見た。わしはジャーラワーンでは殉教者ヌーラー³とも友達になった。わしはかれの身体の傷をこの手で洗った。族長、イギリス人はマリー一人を殺した。ジーアンドは牢獄で死に、彼らはヌーラーを殉教者にした。彼らはバローチ人のハーンをピシンで幽閉した。彼らは国じゅうを荒らしまわったが、わしはまだ生きておる。これまでわしの使命は、あのマリー一人の勇ましい刀自の言葉を伝えることだった。」

この話をするや老人は立ち上がり、皆が見ている中、暗闇へと去って行った。

² イギリス軍に抵抗して逮捕された Sardār Jīand Khān。

³ イギリスに対して 1910 年から 9 年間にわたって抵抗し獄死した Nūrā Mengal。

ガムフアール・ハヤート作『愛の囚人』(2019)

ある冬の朝、北風の冷たさが落葉が始まったという知らせをもたらした。こんなふうにいる所に落葉が散り拡がっていることも、春が遠くへ行ってしまう証だった。私はあのベンチにいつものように座って、あなたを待っていた。突然私の顔に、あなたの冷たくてやわらかな手の感触がした。私はあなたの手の上に、自分の手を置いた。するとあなたは、美しくほほえみながら私の前に立った。まるで空に広がるちぎれ雲に接吻で挨拶しているかのような優しいほほえみだった。

私は言った。「また今日も遅かったね。」

あなたはもう一度ほほえんで言った。「言わないで。」

私はそれ以上は言わなかった。あなたは私の手を取って、私を立ち上がらせた。それから私たちは乾いた落葉の上を歩き、お互いを見ながらゆっくりと話した。落葉の音には、哀しいながらも静かな旋律があった。

あなたは言った。「私たちがこの枯れ葉を容赦なく踏みつけてるみたいに、時々世の中が人の思いを踏みつけるわね。」

私は言った。「ほんと、人間はこの宇宙で一番利己主義の動物だよ。私はこれまで何人も、自分では節操の固いという人を見てきたけど、いざ自分の仕事や利害のためとなるとみんな節操なんか眼中になくなってしまう。」

あなたは言った。「そのほかにも、この落ちた枯れ葉は、人間が命の木につながっている限り価値があるって教えてくれているの。命の木から引きちぎられた途端、この落葉みたいに用なしになってしまうのよ。」

私はあなたが話を続けてくれるよう、相槌を打ちながら言った。「この落葉は、登りがあればかならず下りもあることも教えてくれているね。」

あなたは言った。「それに、青々とした木の葉だって枝から落ちてしまうようなことも起こるわ。」

私は言った。「そうだね。時には突風で飛ばされるみたいに、猛烈な逆境や不運で飛ばされてしまう、そんな葉もあるね。根がしっかりしていれば風も落とせないけど、さもないと…」

私たちがこんな話をしていると、一気に強烈な風が吹いて、私たち二人

を吹き飛ばしてしまった。私たちは空から、鳥たちの群れとともに降りてきた。すべての憂いから解放されて、雲の中を飛んでいる鳥たちと。鳥たちは心の赴くまま、どこへでも自分たちの流儀で飛んでいく。あなたはその鳥たちを見て、私に言った。「もしかして私たちも、人間ではなくて鳥だったらよかったかもね。」

私はあなたのその言葉には同意しなかったけれど、あなたを元気づけるために「そうかもね」と言った。

あなたは眉間に皺を寄せて言った。「そんな『そうかもね』は私、嫌いよ。」そして私たちは鳥たちと共に、春めいたいろどりと香りに満ちた園へと降りた。どうやって落葉から春へとたどり着いたのか、私は不思議に思った。園にはいろんな花が咲いていて、花の上には雨が降っていた。雨の滴とともに蝶が舞っていて、小さな光を放っていた。雨の滴と光の踊り。何という眺めだったか！さまざまな木々には、とりどりの果実が実り、水路を水が流れていた。鳥や蝶があちらこちらへと飛んでいくさまは、美しい虹のような情景だった。どこからともなく心を潤す旋律が、口琴の音のように耳に入ってきた。あなたは蝶を追って走っていった。私はあなたの後を追った。

すると蝶は、妖精たちの集まっているところへ行った。妖精たちはあなたを見ると抱擁した。彼らはあなたの手や頬に接吻し、あなたは怯えた。彼らは言った。

「おまえは妖精だね。どういうわけでこの獣たちと一緒にになったんだい？ 私たちはおまえをこの獣たちには決して渡さないよ。私たちの美しい世界にとどまりなさい。ここにあるのはただ花や春、とりどりの色、虹、ちぎれ雲。私たちは星や鳥や蝶と遊び、歌を歌い、音楽を奏で、手を叩いている。世界の美という美がここにあり、あらゆる色どりがここにある。

おまえたちには何がある？ おまえたちは、あらゆる仕事を誇示するために行い、おまえたちの行いはみな偽りで、おまえたちのほほえみも心底からではなく、おまえたちの愛は打算の衣で包まれている。

おまえたちの世界と違って、ここには心配はなく、誰も他人を恐れたりしない。おまえの世界のように愛が非難されることはなく、誰も人を憎ん

だりしない。ここでは誰もが悩みなく、誰もが悲しみから自由なんだよ。」

私は叫んだ。「私は彼女を愛しています。あなたたちには渡しません。彼女を取り返します。」

妖精たちは私の言葉を笑って言った。「おまえたち人間が愛を知っているだって？ 私たち妖精から自由になるためにそう言っているだけだろう？」

(彼女は言った。)
「今日は放してください。私は行きますが戻ってきません。」

彼らは言った。「放してあげよう。でも一つ条件がある。おまえの声で詩を歌いなさい。私たちがおまえの詩に音楽を奏でよう。伴奏をして踊ってあげよう。」

あなたは詩を歌いはじめた。妖精は音楽を奏で始め、踊り始めた。あなたも踊り始めた。私にはあたかも、すべての花や木、色や虹、景色、雲、ちぎれ雲、月や星、ランプや灯があなたと一緒に踊っているように感じられた。さらには宇宙全体が踊っていた。この踊りとともに、あなたと妖精たちに陶酔が起こり、あなたは妖精たちと恍惚へと入っていった。私は、あなたが私のことを忘れてしまうのではという恐れを抱いた。あなたは妖精たちと共にそうやって合奏をしていた。私には、あなたも妖精の一人なのではという疑念が起こった。何という陶酔が旋律とともに広がっていたことか！

その時、この心の状態から、誰かの足音で私は我に返った。私はあちらこちらを見た。そこにはあなたはおらず、あの眺めもなかった。そこは私がこの三十年間囚われている暗い独房だった。私の足と手は鎖で固く固く縛られていた。その時私は気づいた。あなたもまた、あちら側の独房で同じように鎖に縛られている囚人なのだ。